『語学教育研究論叢』第 39 号

中華民国初期における中国語白話文法の場所詞について

田村　新

About Place Names in Colloquial Chinese during Early Republican China

TAMURA Arata

摘要（中国語）

龚千炎认为 1920 年代出现的现代汉语语法研究的特点、是模仿西方语法。本文以现代汉语语法为对象的民国初期出版的语法书为对象、从①国家等专有名词、②承认场所的名词、③方位词、④代词、⑤名词短语、这五个角度来看怎样记述场所词、从而判断龚千炎的分析是否妥当。考察结果、本文认为①马继桢等自觉地认为表示国家等的专有名词可以用作场所词。②马继桢认为承认场所的名词可作为场所词。认定名词可作为场所词这一点上、学者各不相同。其他的语法书里也有用这些名词、但诸家认为这些名词各个不同。③诸家基本上认为方位词是副词。但一部分著述作认为单纯方位词是形容词、合成方位词是副词。④多数人将指示代词认做副词。但指示代词与 “里” 等后缀词的接续各不相同。⑤诸家都用过名词短语的例句。但解释这个语言现象的只有王应伟等二人。从这些结果来看、民国初期还没有关于场所词的统一化的解释、因此本文得出的结论、是龚千炎提出的指摘不大妥当。

キーワード：場所詞　初期白話文法群　固有名詞　方位詞　名詞句

はじめに

中国では中華民国初期[1]の 1920 年前後より、いわゆる言文一致運動のなかで白話文[2]を記述した文法著作が現れる。田村 2009：1 によれば 1920 年から 1924 年までの 4 年間に、13 の文法著作が出版された。本稿ではこれらの著作などを「初期白話文法群」と呼ぶ。龔千炎は、「この時期の文法研究の特徴は西洋文法の模倣に見られる」（龔千炎 1997：3）

と述べている。龔千炎が述べるとおりであるならば、初期白話文法群の文法記述は非常に似たものになることが想像される。そこで、この初期白話文法群が場所詞をどのように記述してきたかを考察することで、龔千炎が述べたように、民国初期の文法研究には西洋文法の模倣という特徴があるとしたことについてその妥当性があるか否かを考察したい。

1．場所詞について

次のような存在を表す文は中国語初級教科書でよく見かける例文であろう。

食堂在那儿。（食堂はあそこにあります。[3)]）

中国語[4)]で存在を表す動詞“在”は場所を表す語を目的語にとる。日本語では「彼は教室にいる。」のように言うことができるが、中国語では一部の名詞を除き、名詞は場所として使用することができない。そのため、“教室”のみでは場所とすることができず、“他在教室里。”（彼は教室にいる。）のように“教室”のあとに方位詞“里”をつける。このように場所として使用できる名詞や代名詞を中国語では総称して場所詞と呼ぶ。

朱德熙は場所詞を体詞とよび、名詞や代名詞と同列に考えている。そして、場所詞となることのできる語について、①地名、②場所と見なせる機関、③合成方位詞の三種類に定義している（朱德熙 1982：42-43）。

劉月華らは場所詞を方位詞や時間詞と同様に名詞としている（劉月華ら 2019：49）。その上で劉月華らは場所詞を①方位詞、②固有名詞、③場所を表す名詞あるいは代名詞、④名詞句（名詞＋方位詞）の四種類に分類している（2019：59-60）。朱德熙、劉月華ともに場所詞を名詞や代名詞と関連付けて論じている。名詞と代名詞は異なる品詞であるが、この異なる二つの品詞を一つにまとめた理由についてはここでは特に述べられていない。

本稿では異なる品詞からなる場所詞について、下記の 5 種類の語を見ることで、初期白話文法群が場所詞をどのように分析したのか考察し、龔千炎がこの時期の文法研究の特徴は西洋文法の模倣にあるということが妥当か否かについて考察をしたい。

①国や地名といった固有名詞　“北京”（北京）、“东京”（東京）など
②場所と見なせる名詞“图书馆”（図書館）、“学校”（学校）など
③方位詞“上边”（上）、“东边”（東）など
④代名詞　“这儿”（ここ）、“这里”（ここ）など
⑤名詞句　“桌子上”（机）、“房间里”（部屋）など

2. 場所詞となる国や地名を表す固有名詞について

それでは初期白話文法群が場所詞となる国や地名を表す固有名詞についてどのように扱っているかを見ることにしよう。

呂雲彪らは固有名詞を「専名詞」と称し、人名や王朝名、さらには国名や地名を表すものと（呂雲彪ら 1920：63）した。場所詞として考えられる固有名詞の例として “美國” “中國” “上海”（呂雲彪ら 1920：63-64）という例を挙げている。しかし、例文からは場所詞として用いられているのかは不明である。

蔡曉舟は固有名詞を「私名」と呼び、陳浚介は固有名詞を「固有の名物詞[5)]」と名付けている。この二氏も固有名詞を例語として紹介はしているが、例文がないため場所詞として使用しているかは判断ができない。

李直は固有名詞を「特別名詞」と呼んでいる。李直は前置詞[6)]について記述する中で、“在中國沿岸、上海是最大的商埠[7)]。”（中国沿岸部で、上海は最も大きな貿易港だ。李直 1920：37）という例文を挙げている。前置詞 “在” のあとには場所を表す語が来る。つまり、李直は “中國” を場所詞と考えていたようだ。

馬継楨は固有名詞を「特別名詞」[8)]と呼んだ。馬継楨は自動詞について記述をする中で、「いくつかの自動詞は、補足語を加えることで、文が成立する。」（馬継楨 1920：25）と述べている。そして、“我到上海。”（私は上海に着く。馬継楨 1920：25）、“他往北京。”（彼は北京へ行く　馬継楨 1920：25）という例文を挙げている。「補足語」は「場所や時を表す語」（馬継楨 1920：25）と述べている。つまり、“上海” や “北京” という固有名詞は場所を表す場所詞と考えているのである。

楊樹達は固有名詞を「独有名詞」、王応偉は「固有名詞」という名前で名詞の下位分類に立てている。いずれも地名や国名が場所詞として用いられている用例がないため、彼らが固有名詞を場所詞として使うことができると考えたか否かについては不明である。

孫俍工は固有名詞を「私名」と呼んでいる。「私名」という名称は蔡曉舟とおなじである。孫俍工は “我希望中國也有一個杜威出來。”（私は中国にもデューイのような人が現れてほしいものだと願う。）“假設中國有兩個袁世凱便不得了。”（仮に中国に二人の袁世凱がいたとしたら一大事だ。）という例文をあげている。中国語の存在を表す動詞 “有”[9)] は主語の位置に主語ではなく、場所を表す語が位置する存現文という特殊な文型をとる。孫俍工は “中國” という語について場所を表すとは述べていないが、例文の構造から考えると “中國” を場所詞と考えていたようである。

爾𤇾は固有名詞を「私名」と呼んでいる。そこには “中國” “上海” といった固有名詞が語例としてあげられている。しかし、例文がないため、場所詞として固有名詞を使用すると考えたかは分からない。

許地山は蔡曉舟や孫俍工などと同じく固有名詞を「私名」と呼んでいる。許地山は「名

詞の格」について記述する中で、名詞には5つの格があるとしている。その格の一つに「向格」[10]がある。この「向格」は「動作が行われる方向、時間、地点を表す」（許地山 1921：17）と定義しており、“他們住在上海底日子不多。”（彼らが上海に住んでいた期間は長くない。）という例文を挙げている。例文についての説明から想像するに許地山は“上海”が場所を表す固有名詞で場所詞と考えたのであろう。

許慕義は固有名詞を「固有名詞」とよんでいる。しかし、例文がないため場所詞として固有名詞を使用しているかは判断ができない。

黎錦熙は固有名詞を「特有名詞」と呼んでいる。黎錦熙は「副詞の性質を持つ目的語」について紹介をするところで、次のような例を挙げている。“他去年在北平、今年到上海、明年往廣州。”（彼は去年北平（北京）におり、今年は上海にやってきて、来年は広州へ行く。　黎錦熙 1924：52）。この文について黎錦熙は「“在”などの自動詞の動作を行う場所を表している」（黎錦熙 1924：52）と述べている。つまり、「副詞の性質を持つ目的語」は場所を表すと考えたのだ。このような説明を見ると黎錦熙は“北平”“上海”“廣州”を場所詞と考えた事が想像される。

場所詞となる国や地名といった固有名詞について見てきた。馬継楨は「補足語」の例として“上海”“北京”という固有名詞を用いた。また、許地山は「向格」の説明として「動作が行われる方向、時間、地点を表す」と述べていた。また、黎錦熙も場所を表す語として使われる「副詞の性質を持つ目的語」の例として、“北平”“上海”“廣州”を挙げていた。馬継楨、許地山、黎錦熙の三氏は固有名詞が場所詞として使用できることを自覚的に理解していたのではないだろうか。李直、孫俍工も彼らの挙げている例文の構造から見ると、固有名詞を場所詞として使っていたことが窺える。しかし、固有名詞と場所についての関係性には言及しておらず、固有名詞を場所詞として自覚的に使用していたかは不明である。

3. 場所と見なせる名詞について

次に場所詞として用いられる“图书馆”“学校”などの場所と見なせる名詞について初期白話文法群がどのように記述したのか考察をしたい。

初期白話文法群では場所として見なせる名詞について、名詞の下位分類として、取り立てて立てているものはないようである。強いていうと、呂雲彪ら 1920 では「群名詞」が場所とみなせる名詞に相当するようだ。呂雲彪らは「群名詞」を「群名詞は例えば軍隊の「師団」「旅団」「連隊」「大隊」「中隊」「小隊」のような社会集団を単位とするものである。多くの人と結びつく社会、国家などはいずれも多くの人の集合体なので、これを群名詞と称する」（呂雲彪ら 1920：65）と述べている。しかしながら、場所として使われている用例については挙げられていない。また、許地山は名詞の下位分類である「公名」の「凡最名」に場所と見なせる名詞を分類している。その例として“樂隊”

（楽団）、“師團”（師団）、“大學校”（大学）、“教會”（教会）、“班”（クラス）、“級”（学年）、“里”（さと）、“鄉”（いなか）（いずれも許地山 1921：14）が挙げられている。

それでは、初期白話文法群では場所と見なせる名詞について触れていないのかというとそうではない。前節で取り上げたが、馬継楨は場所や時を表す名詞を「補足語」と定義した（馬継楨 1920：25）。馬継楨は次のように述べている。

いくつかの自動詞は、補足語（全ての場所や時を表す名詞は補足語と呼ばれる）を加えなければならず、補足語を加えることで文として成り立つ。たとえば “學生在學校。”（学生が学校にいる。）“我到上海。”（私が上海に着く。）“他往北京。”（彼が北京へ行く。）“今天要出門。”（今日出かけなければならない。）などが補足語の例である。（馬継楨 1920：25）

ここは自動詞について述べている箇所である。馬継楨は場所や時を表す名詞を補足語と定義した。つまり、動詞 “在” の後ろには場所を表す語であり、“學校” が場所を表す名詞として用いられていると考えていたのである。馬継楨は補足語の説明の中で “門”（門）“門裏”（門の中）“這個地方”（この場所）（いずれも馬継楨 1920：89）をその例として挙げている。

さて、場所と見なす名詞となるかどうかという点は諸氏によって異同がある。馬継楨は “學校” を場所として考えていたようであるが、その “學校” について、王応偉は “到學校裏來上課”（学校まで来て授業を受ける。　王応偉：第一編 38）という例文を挙げ、“學校” を単独ではなく、“學校裏” という名詞句の形で用いている。爾㝢も “我到學校裏去讀書。”（私は学校まで行って勉強をする。　爾㝢 1921：63）という例文を挙げ、“學校裏” という名詞句を使用している。また、許地山には “孩子們在學校裏念書、在公園裏散步、並且在家溫習功課。”（子どもたちは学校で勉強し、公園で散歩し、そして家で授業の復習をする。　許地山 1921：62）という例文がある。この文は三つの節が並列であり、場所として使われている “學校” “公園” には “裏” をつけ、名詞句としている。しかしながら、並列構造の同じ構造になるはずの “家” には “裏” がついていない。さらに、許地山は自動詞が他動詞として使われる例として、“他臥病在床、不能起來。”（彼は病で伏せベッドにおり、起きることができない。　許地山 1921：27）という例文を挙げている。“床” は “在” のあとにあるので、“床” も許地山は場所として考えているようだ。

許地山の例文では “家” が場所と見なされていた。この “家” についてみると、楊樹達は平叙文の否定で “趙先生不在家。”（趙さんは家にいない。　楊樹達 1920：71）という例を挙げている。楊樹達は “家” を場所として見なしているようだ。一方で、馬継楨は動詞 “有” について述べているところで、“應縣有座高塔　園裏有許多花草　家裏有五彩圖畫”（応県には高い塔がある。庭には沢山の草花がある。家には色とりどりの絵がある。

馬継楨 1920：27）という例文を挙げ、“家” に方位詞 “裏” をつけることで場所としている。この例文について「以上の “有” の字の前にある “應縣” “園裏” “家裏” は場所を表す補足語で、“有” の字の主語ではない。“有” の字の後の “高塔” “花草” 等が一種の倒置された主語である。」（馬継楨 1920：28）と述べている。つまり、地名を表す “應縣” も “園裏” も “家裏” も場所詞と考えていたことが分かる。馬継楨は “家” ではなく “家裏” という名詞句を使用した。また爾罧も平叙文の例として “他正在家裏。”（彼は家にいる。　爾罧 1921：72）、“他此刻不在家裏。”（彼はいま家にいない。　爾罧 1921：72）という例文を挙げており、場所として使用される “家” に “裏” をつけ、名詞句の形で使用している。

場所詞として見なすことのできる名詞について見てきた。馬継楨は場所として見なすことのできる名詞、つまり場所詞があることを自覚していたようだ。しかし、馬継楨が場所詞として考えた “學校” は、王応偉、爾罧は名詞句としていた。このほかにも楊樹達や許地山は “家” を場所と見なしていたが、この “家” について馬継楨、爾罧は名詞句としていた。このように異同があるということは、初期白話文法群に場所として見なすことのできる名詞についての統一的な見解が存在していなかったことを示しているからではないだろうか。

4. 方位詞について

次に、方位詞について見る。中国語の方位詞は “东”（東）“南”（南）のような方位、“上”（上）“下”（下）“左”（左）“右”（右）といった方向、さらには “里”（うち）“外”（そと）といった語をさす。これらは一部を除いて、通常は “边” “面” といった接尾辞をつけ、場所詞として用いられる。方位詞は名詞の下位に分類するのが一般的な分類法であろう。このような方位詞を初期白話文法群はどのように記述してきたであろうか。

呂雲彪らは方位詞を「状地状詞」という品詞に分類している。「状詞」は副詞の事である。呂雲彪らは「状地状詞は動詞の動作が及ぶ場所のことを形容するもので、“上” “下” “遠” “近” “東” “西” “南” “北” “左” “右” “前後”（ママ）さらには “東面” “西面” “南面” “北面” “左邊” “右邊” “前面” “後面” などのようなものである。」（呂雲彪ら 1920：85）と述べている。距離を表す “遠” “近” を除けば、ほぼ現在の方位詞と同じ語だといえる。しかしながら、名詞の下位ではなく副詞である「状詞」の下位に分類している。これは呂雲彪らがいうように、動作が及ぶ場所を説明するので副詞と考えたためであろう。

蔡曉舟は方位詞については述べていない。

陳浚介は方位詞については場所に関する「疏状詞」に分類している。この「疏状詞」は副詞の事である。方位詞を副詞と考えた点は呂雲彪らと同じと言えよう。中国語では副詞は動詞などの述語の前が定位である。しかしながら、陳浚介が挙げた例文を見ると “我家的右邊有一頂橋。”（私の家の右手に橋がある。　陳浚介 1920：37）、“滄浪亭在我校的南邊。”（滄浪は私たちの学校南側にとどまる。　陳浚介 1920：37）のように方

位詞は必ずしも述語となる動詞の前にあるわけではない。陳浚介は「疏状詞の用法は複雑で、ここに挙げた例は非常に大雑把なものに過ぎない。実のところ、この種の語は多くの変化や修飾される場所に違いがある。形容する語の前で修飾することもあれば、形容する語の後にくることもある。」（陳浚介 1920：44）と述べており、陳浚介自身も判断に迷ったことが窺える。

李直は方位詞を「地位副詞」として副詞に分類している。この「地位副詞」には指示代名詞も含まれる。この点はこれまでの諸氏と異なるところである。李直は「地位副詞は場所を解釈するもので、“這裏” “那裏” “上面” “下面” “高頭” “下底” などがある。“這裏（在這地方）有一個人。”（ここには一人の人がいる。）のように言う。」（李直 1920：31）と述べている。李直は方位詞が述語となる動詞の前で使われているので、副詞と考えたのである。

馬継楨は方位詞を形容詞に分類している。馬継楨 1920：32-33 にかけて「形容詞表」という表がある。その中に “東” “西” “南” “北” “中” “內” “裏” “外” “左右”（ママ）が挙げられている。馬継楨は「全てのものにはそれぞれ形状、性質、数量、位置の区別がある。これらを区別する字を形容詞という。」（馬継楨 1920：32）と述べており、さらに「全ての静かで動いていない状態を説明するものを形容詞という。また、静詞ともいう。」（馬継楨 1920：33-34）と述べている。方位などは位置を示し、動きがないので、馬継楨は形容詞としたのだろう。前述したが、馬継楨は場所や時を表す名詞を「補足語」と定義した（馬継楨 1920：25）。馬継楨は “從西北角上颳來一股大風”（西北の角から大風が吹いてくる。　馬継楨 1920：89）という例を挙げ、“從西北角上” には「補足語」との注を付けている。

楊樹達は方位詞を「表地副詞」という副詞の下位分類として立てている。この「表地副詞」は「場所は方向と関係のあることを表す副詞である」（楊樹達 1920：45）と述べており、方向と関係のある方位詞をここに分類したのだ。“他前面走、他的兒子後面跟著。”（彼は前を歩き、彼の子どもが後ろについていく。　楊樹達 1920：54）、“你只南走、便到了那學校的後身。”（あなたはただ南に歩けば、すぐにあの学校の裏手につく。楊樹達 1920：55）という例を挙げており、下線部が「表地副詞」としている。同じ「表地副詞」の例として “我昨日在公園、遠遠的看見他從外面來了”（昨日公園で遠くに彼が外から来るのがみえた。　楊樹達 1920：55）という例では “遠遠的” に下線が付してあるものの、その後ろの “外面” には下線が付されていない。この文の述語は “看見”（見える）である。このため、楊樹達は “遠遠的” を「表地副詞」と考え、“外面” には「表地副詞」として、下線が付されていないのであろう。

王応偉は方位詞を形容詞の下位分の「方位形容詞」と副詞の下位分類の「地所の副詞」にそれぞれ分類している。形容詞と考えたものは “前” “上” などで、副詞と考えたものは “前面” “上面” などである。形容詞は単純方位詞であり、副詞は合成方位詞[11]となる。

単純方位詞は名詞の前に置かれ、名詞を修飾する。一方で、合成方位詞は述語の前に置かれ、副詞のように用いられる。このような違いを王応偉は品詞の違いと考えたのであろう。

孫俍工は方位詞を副詞の下位分類「地位副詞」に分類している。“這兒” “那裏” といった指示代名詞も「地位副詞」に分類している。この「地位副詞」の例として、“東邊” “西面” のような合成方位詞を例としてあげる一方で、“南” “左” “前” のような単独方位詞は「（南、北…）」（孫俍工 1921：93）のように括弧でくくられており、他の方位詞と区別をしている。“南” 等を使用した例文は存在しないため、この括弧の意図ははっきりとは分からないが、おそらく単独方位詞は単独では使われないという事を表しているのであろう。

爾槑は方位詞について特に述べていない。爾槑は形容詞の定義を「名詞につけ、そのものの性質や状態や量を表す」（爾槑 1921：27）とし、また副詞は「動詞、形容詞あるいは他の副詞につき、状態や程度を表す。」（爾槑 1921：28）と定義した。他の品詞についても定義をし、その例を二、三紹介するのみで、多くの例が紹介されているわけではない。このために、方位詞となる語については特に例が挙げられていないのであろう。

許地山は方位詞について明確にどの品詞のものとは述べていない。しかしながら、「地位副詞は動作や形容をする場所を表す」（許地山 1921：36）という「地位副詞」の例として “我在這後面跟着。”（私はこの後ろについている。　許地山 1921：36）という例を挙げている。この記述を見ると方位詞は「地位副詞」と考えていたのだと思われる。許地山は “東” “南” といった方位を表す名詞については自動詞の説明で “他生長於東方。”（彼は東方で育った。　許地山 1921：27）という例を挙げている。例が少ないため全ての方位詞を「地位副詞」と考えたかについては不明である。

許慕羲は方位詞を形容詞の下位分類に当たる「方向指示形容詞」と副詞の下位分類に当たる「地所の副詞」に分類している。「方向指示形容詞」について「方向指示形容詞は事物の方向や位置を表す」と定義しており、“今天住東廂房了。”（今日は東の部屋に泊まる。　許慕羲 1921：下編 8）という例を挙げ、「“前” “後” “左” “右” “內” “外” “上” “下” などがこの形容詞に属する」と述べている（許慕羲 1921：下編 8）。「地所の副詞」については「地所の副詞はものがあるところの位置や方向と関係のあることを指す。」（許慕羲 1921：下編 12）と述べており、その中で “上面有人。”（上に人がいる。　許慕羲 1921：下編 12）という例を挙げている。このほかに「地所の副詞」の方位詞を用いた例がないが、おそらく名詞の前に置かれ名詞を修飾するものを形容詞とし、述語の前で使われるものを副詞としたのであろう。王応偉と同じように考えたようだ。

黎錦熙は方位詞を副詞の下位分類にあたる「地位副詞」で述べている。しかし、黎錦熙は「位置や方向を表す品詞で大部分は実体詞に属する。しかし。これらは通常副位であらわれる。副位で介詞を伴わない時には、副詞と同じような場所で用いられる。

つまり、場所を特別に表す副詞はない。副位にある方位名詞と指示代名詞なのだ。」（黎錦熙 1924：172）と述べている。「実体詞」というのは名詞と代名詞を指す（黎錦熙 1924：9）。黎錦熙ははじめて方位詞は名詞の一種と述べたのである。黎錦熙は「地位副詞」として用いられる名詞として、“東” “西” “南” “北” “左” “右” “前” “後” “上” “下” “裏” “外” を挙げ、「常に “方” “面” “邊” “頭” 等の字がつき、合成語を構成する」（黎錦熙 1924：172）との注を付けている。

方位詞について見てきた。方位詞は副詞として考えられることが多かった。しかし、単純方位詞と合成方位詞を区別する王応偉と許慕羲は、単純方位詞を形容詞とし、合成方位詞を副詞と区別していた。彼らはその方位詞が用いられる場所で区別をしたようだ。方位詞を名詞の一種と述べたのは黎錦熙のみであった。

5. 指示代名詞について

つぎに指示代名詞を見ていこう。中国語の指示代名詞は近称の “这” と遠称の “那” からなる。そして疑問代名詞の “哪” がある。これらに接辞 “儿” “里” が付くことで場所を表す。つまり、“这儿” は「ここ」、“那儿” は「あそこ」、“哪儿” は「どこ」となる。それではこのような指示代名詞を初期白話文法群はどのように考えたのか見ていくことにしよう。

呂雲彪らは “這裏” “這邊” “那裏” “那邊” などは「指示代名詞」に分類し、疑問詞の “那裏” は「疑問代名詞」に分類している。名称の異同はあるが、呂雲彪らのように近称と遠称を指示代名詞とし、さらに疑問代名詞に分類するのは、陳浚介、楊樹達、許地山、許慕羲も同じである。しかし、分類法は同じであるが、内容に異同がある。

陳浚介は「場所」と「方向」を区別している。「場所」を表すものとして “這裏” “那裏” を、「方向」を表すものとして “這邊” “那邊” を挙げている。

楊樹達は近称を “這兒” “這裏”、遠称を “那兒” “那裏”、許地山は近称を “這裏” “這邊”、遠称を “那裏” “那邊”、許慕羲は近称を “這裏” “這兒”、遠称を “那裏” “那兒” とし、この三者で接辞 “兒” “邊” を使うかで異同がある。

蔡曉舟は “這裏” を「眼前の代名詞」とし “那裏” は「遠方の代名詞」としている。蔡曉舟は疑問を表す代名詞に “哪” があることは述べている（蔡曉舟 1920：11-12）。しかし、“這裏” “那裏” に対して “哪裏” という語については触れていない。爾罧も蔡曉舟と同様に分類し “這裏” “那裏” という指示代名詞を例として挙げているが、疑問代名詞 “哪裏” という語については触れていない。蔡曉舟にせよ爾罧にせよ疑問代名詞の存在を考えていなかったという事ではなく、例としてあげていなかっただけだと思われる。

馬継楨は指示代名詞と疑問代名詞をまとめて、「指示代名詞」としている。“這裏” “這兒” “那裏” “那兒” は例語としてあげているが、疑問代名詞の “哪裏” は例としてあげていない。

李直は指示代名詞の“這裏”“那裏”と方位詞の“上面”下面“”等とをあわせ「地位副詞」としている。李直は述語となる動詞の前で使われているので、副詞と考えたのである。疑問を表す“那裏[12)]”は「疑問副詞」としている。李直は「「疑問形容詞」、「疑問代名詞」、「疑問副詞」は時に次のような同じ語が用いられる。　這是那裏？（副詞）在那裏（代名詞）你看見他？　他是那裏（形容詞）人？」（李直 1920：35）と述べている。疑問を表す“那裏”には副詞と代名詞、形容詞の三つの用法があるということだが、“這裏”“那裏”についてはこのようなことは述べていない。王応偉、孫俍工の二氏も李直と同様に指示代名詞を他の方位詞とまとめ、副詞に分類した。このように考えたのは場所を表す指示代名詞と方位詞が述語の前、つまり副詞と同じ場所で使われると考えたからのようである。

黎錦熙は呂雲彪らと同様に“這裏”“那裏”を「指示代名詞」、疑問を表す“那裏”は「疑問代名詞」に分類している。その上で、「地位副詞」について前述の通り、「位置や方向を表す品詞で大部分は実体詞に属する。しかし。これらは通常副位であらわれる。副位で介詞を伴わない時には、副詞と同じような場所で用いられる。つまり、場所を特別に表す副詞はない。副位にある方位名詞と指示代名詞なのだ。」（黎錦熙 1924：172）と述べている。指示代名詞や疑問代名詞ではあるが、用法としては副詞の用法と述べているのである。

指示代名詞について見てきた。近称、遠称を指示代名詞とし、さらに疑問代名詞に分類するのが多数派といえよう。一方で使用される場所から指示代名詞を方位詞とあわせ副詞としたものも少なくない。また多数派の分類であっても場所を表すのに使用する接辞“裏”“兒”“邊”での異同があった。当時何が場所を表す代名詞となるのかということについて統一的見解がなかったと言うことではないか。仮に初期白話文法群が西洋の文法体系を模倣したのであれば、このような異同はなかったのではないだろうか。このように異同があるのは、諸氏がそれぞれに中国語の文法について考察をした結果なのではないだろうか。

6. 名詞句について

つぎに名詞句を場所詞とする場合を見ていこう。中国語では“书架上”（本棚）、“房间里”（部屋）のように名詞に方位詞の“上”“里”などがつくことで、名詞句を構成する。この名詞句は場所詞として用いられる。また、人を場所とする場合、中国語では人称代名詞に指示代名詞の“这儿”“那儿”をつけ“她那儿”（彼女のところ）のように使われる。では、初期白話文法群がこの名詞句についてどのように記述したのか見てみよう。

呂雲彪らは場所詞となる名詞句の用法については説明がない。しかし、動詞“在”の例として、“在世界上做人、要曉得人的道理。”（世の中で身を処するには、人の道理を分かっていなければならない。　呂雲彪 1920：78）との例文がある。“世界”を場所と

するために方位詞 “上” を付け、名詞句としたのである。

呂雲彪らのように場所詞となる名詞句について説明がないものの、例文に場所詞となる名詞句が使用されている例が多数ある。

蔡曉舟は自動詞に前置詞 “在” “于” をつける例として次のような例文を挙げている。“他坐在屋裏。他坐于屋裏。你站于門外。你站在門外。”（彼は部屋で座っている。　彼は部屋で座っている。あなたは戸の外にたっている。あなたは戸の外にたっている。　蔡曉舟 1920：39）。この例文の目的語 “屋” “門” は動詞 “坐” “站” の場所となるが、そのために “裏” や “外” を付け、名詞句にしているのである。

陳浚介は動詞の用法の説明の中で “他把一張紙夾在書裏。”（彼は一枚の紙を本に挟んだ。　陳浚介 1920：30）という例を挙げている。また、動詞の時制の説明の中で “他到校裏去了。”（彼は学校へ行った。　陳浚介 1920：32）という例を挙げている。また前置詞に当たる「前置助詞」の例文として “他坐在椅子上。”（彼は椅子に座っている。　陳浚介 1920：46）という例を挙げている。陳浚介は名詞に方位詞 “裏” もしくは “上” を付けることで場所とする例を挙げているのである。

李直は「助動詞」の例文として “他從牀上起來。”（彼はベッドから起き上がった。　李直 1920：29）という例をあげている。また、接続詞の説明で “他走了一天、所以晚上很疲倦的回到家裏。”（彼は一日歩いたので、夜疲れて家に帰った。　李直 1920：44）という例を挙げている。“牀” や “家” に方位詞 “上” “裏” をつけ場所としているのである。また、文と文成分の語順について記述しているところで次のような例を挙げている。“他（主詞）放（語詞）這書（止詞）在桌上（補足詞）”（彼は（主語）この本を（目的語）机の上に（補足語）置いた（述語）　李直 1920：58）。また、「補足詞」について李直は「補足詞は名詞ではなく副詞としての修飾語として用いられている」（李直 1920：61）と述べている。また、李直は「補足詞」の説明で、“他放這書亂七八糟的在桌上。”（彼はこの本をめちゃくちゃに机に置いた。　李直 1920：61）という例文を挙げている。名詞が場所を指し、副詞のような修飾語を作ると述べており、その中で “桌上” という例を用いている。名詞に “上” を付けることで場所としていると考えている事が窺える。

馬継楨は副詞 “差不多” の例文に “他在學校裏、差不多快畢業了。”（彼は学校で、もうすぐ卒業する。　馬継楨 1920：46）という例を挙げている。

楊樹達は時間や場所を表す前置詞を記述する中で “當冬天時候、一家人在火爐旁坐著。”（冬になると、家族はコンロのそばで座っている。　楊樹達 1920：62）という例文を挙げている。楊樹達は “旁” も “上” “裏” と同様に名詞句を構成することができると考えたようである。

王応偉は場所を表す前置詞の解説で、「このほかに “在～內” “在～中” “當～上” は “在書房內”（書斎で）“在樹林中”（林で）“在大門外”（表門で）“當大路上”（大通りで）のように文を作り、どれも一定の範囲の内や外で動作や状態を表す関係にある事をあら

わせる。」（王応偉 1920：第 1 編 52）と述べている。「一定の範囲の内や外」と述べており、場所を意識しているように思われる。“上” などの方位詞を場所とするために、王応偉は自覚的に名詞句を使用しているように思われる。王応偉はさらに形容詞の修飾語の例で “公園裏的樹木、都是很古的。”（公園の樹木は全て古い。　王応偉 1920：第 3 編 31）という例を挙げている。王応偉は「場所を表す副詞的修飾語」の中で次のような 2 つの例を挙げている。“對面壁上、掛着一幅名畫。”（向かいの壁には一幅の名画が掛けてある。　王応偉 1920：第 3 編 61）“他在竹榻上、還沒有醒。”（彼は竹の寝台にいてまだ目覚めていない　王応偉 1920：第 3 編 61）。王応偉はこれらの例文について「この例の “對面壁上” “在竹榻上” は動詞 “掛” “醒” の副詞的な修飾語で、全て動いていない範囲を表す。」と述べている。つまり、“上” を付けた名詞句が場所詞として機能していることを自覚しているのである。

何仲英は『教育雑誌』に 1921 年に 3 度にわたり「水滸伝釈詞」という論文を発表している。この論文は『水滸伝』で使用されている語彙の語釈をしたものである。何仲英は “因此上”（そのために）の語釈で次のように述べている。「“上” はもともと一定の範囲内にある位置のことを表す。例えば “海上”（海）、“隴上”（畑）、“樓上”（建物）、“桌上”（机）などである。」（何仲英 1921：18387[13]）。何仲英は名詞に “上” をつけ、名詞句とすることで一定の範囲に位置する、すなわち場所として捉えていたことが窺える。

爾罧は前置詞の解説で “我在火邊坐。”（私は火のそばに座る。爾罧 1921：29）という例を挙げている。また、「補足語」の説明で “我到學校裏去讀書。”「私は学校に行って勉強する。爾罧 1921：63」という例を挙げている。爾罧は “邊” “裏” を付け名詞句とし、“火邊” や “學校裏” が場所と考えているようである。しかし、爾罧はこの名詞句が場所になるとは述べていない。

許地山ははじめて人を場所とする例を出している。“我教他到你那裏去。”（私は彼をあなたのところに行かせる。　許地山 1921：30）がその例である。許慕羲も許地山と同じように人を場所として捉える例を挙げている。“從他們那裏來的。”（彼らのところから来た。　許慕羲 1921：上編 25）がその例である。このような例文はあるが許地山も許慕羲も人称代名詞に指示代名詞をつけることで人を場所とするという事は述べていない。

黎錦熙は連用修飾語である「副位」を説明した例文で “茶棚裏坐著許多的工人。”（お茶屋さんにたくさんの工人が座っている。　黎錦熙 1924：47）と “裏” を使った名詞句を用いている。また、連体修飾語を述べた箇所 “在自己一個小花園裏、按着時令、種各種的鮮花、是一件很快樂的事”（自分の小さな庭で、季節によって、様々な花を植えるのは、とても楽しいことだ。黎錦熙 1924：80）という例文で “裏” を使った名詞句を用いている。また、不定の数を表す “些” について、“你這裏有些甚麼菜？”（あなたのところにはどんな料理がありますか？　黎錦熙 1924：153）という例を挙げ、人を場所と

する例文を使用している。程度副詞について “她在這一班裏、年紀最輕、功課最好。”（彼女はこのクラスで、もっとも若いが、もっとも成績が良い。　黎錦熙 1924：186）という例を挙げている。「時地介詞」を説明したところでは “滿屋子的孩子們、有的站在椅子上、有的躺在地板上、有的躲在書架後、有的蹲在書案下。”（部屋中の子どもたちは、ある者は椅子に立ち、ある者は床に寝そべり、ある者は本棚の後ろに隠れ、ある者は机の下にうずくまっている。　黎錦熙 1924：198）という例文を挙げており、“上” “後” “下” を付けて名詞句としている事がわかる。述語の後ろからの副詞的修飾語の説明 “咱們同到公園裏走一走吧！”（私たち一緒に公園まで行ってちょっと歩きましょう。黎錦熙 1924：235）のように名詞句の例を挙げている。黎錦熙も多くの名詞句の例を用いてはいるが、これらの名詞句が場所詞として用いられているという説明はないようである。

場所詞となる名詞句について見てきた。この名詞句はどの著作にも例として使用されていたので、日常的に用いられていた言葉であることは確かなようである。しかし、このような現象について言及をしていたのは王応偉と何仲英のみであった。

7. まとめ

本稿では初期白話文法群が場所詞となる①国や地名といった固有名詞、②場所と見なせる名詞、③方位詞、④代名詞、⑤名詞句の 5 つをどのように記述してきたかを見ることで龔千炎がいうように、民国初期の文法研究には西洋文法の模倣という特徴があるとしたことについてその妥当性を考察した。

国や地名といった固有名詞について、馬継楨、許地山、黎錦熙は国や地名を表す固有名詞が場所詞として使用できることを自覚的に理解していた。場所と見なせる名詞について、馬継楨は場所と見なすことのできる名詞を「補足語」としていたので場所として自覚的に使用していたようである。また、どの名詞が場所詞として使用できるか諸氏で異同が大きいことが分かった。方位詞は基本的に副詞と判断されていたが、王応偉と許慕義は単純方位詞を形容詞と、複合形容詞を副詞と考えた。代名詞は副詞と考えるのが多数派ではあるが、指示代名詞を場所とする際に “裏” などの接辞には異同があった。また、黎錦熙一人が方位詞を名詞と考えた。名詞句について、名詞に方位詞をつける例文は諸氏で使っているが、この現象を説明したのは王應偉と何仲英のみであったことが分かった。

場所詞となる語をどのように分類するかという点では初期白話文法群は似た内容となっていた。しかし、実際の例文などその内容を詳細に見ると、場所詞となる語についての記述の内容や、言語事実について自覚的に記述しているか否かという点で差が見られ、その研究の質は必ずしも均一なものとは言えない。このようなことから本稿では龔千炎が初期白話文法群は西洋文法を模倣したということについて、妥当性は低

いと結論づける。

注

1）　本稿が指す中華民国期とは 1912 年から 1949 年までのことを指す。

2）　ここでの白話文は民国期に話し言葉によって書かれた文を指す。

3）　本稿の邦訳は括弧内に書き、特に断りがない限り執筆者による。また引用以外の中国語に関しては簡体字で表記をし、文献を引用した場合は原文の繁体字を使う事とする。

4）　本稿では中国の共通語である普通話を便宜的に中国語と呼ぶ。

5）　陳浚介は名詞を「名物詞」と呼んでいる。

6）　中国語学では前置詞のことを「介詞」と呼ぶ。しかし、本稿では便宜的に前置詞と呼ぶことにし、中国語の原文を翻訳する際にも、前置詞と訳す。

7）　原文は固有名詞に下線を付すなどしているが、本稿では見やすくするために、このような下線などは断りのない限り省略する。

8）　李直は「特別名詞」の説明で「「特別名詞」（または「固有名詞」、あるいは「専有名詞」ともよぶ）は一個人、一国、一王朝、一地方、一風景、一省県の特別な名称で、普通の名称ではない。そこで特別名詞と呼ぶ」（馬継楨 1920：4）とのべており、当時「固有名詞」という名称が使われていたことが窺える。

9）　“有” には存在のほか、所有の意味を表すことがある。そのような意味で使われるときには、主語は主語として現れる。“我有一个弟弟。”（私は弟が一人いる。）

10）　フィンランド語では場所を表す格の一つに向格があるとされるが、許地山は場所だけではなく時間も指すものをも「向格」と定義している。フィンランド語の向格と許地山の向格の関連性については今後考察をしたい。

11）　中国語では “东” “前” のように単独で使われる方位詞を単純方位詞とよび、“儿” “里” といった接尾辞のついたものを合成方位詞と呼ぶ。

12）　民国期は遠称の “那” と疑問代名詞 “哪” はいずれも漢字表記としては “那” が使われることがあった。

13）『教育雑誌』では論考毎にページ数が付されている。そのため、本稿ではリプリント版につけられた通しのページ数を付す。

参考文献

蔡曉舟 1920.《國語組織法》、上海：泰東圖書局。
陳浚介 1920.《白話文文法要綱》、上海：商務印書館。
爾畧 1921.《國語文法講義》、上海：中華書局。
龚千炎 1997.《中国语法学史》、北京：语文出版社。
何仲英 1921.〈水滸傳釋詞〉、王雲五 1975.《教育雑誌》（景印版）13 巻 6 号：18385-18407。
黎錦熙 1924.《新著國語文法》、上海：商務印書館。

李直 1920.《語體文法》、上海：中華書局。
刘月华・潘文娱・故韡 2019.《实用现代汉语语法》（第三版）、北京：商务印书馆。
呂雲彪・戴渭清・陸友白 1920.『白話文做法』、上海：太平洋学社。
馬繼楨 1920.《國語典》、上海：泰東圖書局。
孫俍工 1921.《中國語法講義》、上海：亞東圖書館。
田村新 2009.「1920 年代前半における中国語白話文法研究について」、首都大学東京都市教養学部人文・社会系『人文学報』418：1-18。
王應偉 1920-1921.《實用國語文法》上・下、上海：商務印書館。
楊樹達 1920.《中國語法綱要》、上海：商務印書館。
許地山 1921.《語體文法大綱》、上海：中華書局。
許慕羲 1921.《白話文法指南》、上海：廣益書局。
朱德熙 1982.《语法讲义》、北京：商务印书馆。